

## 見方を変えると、あたたかな 家庭の姿が現れた。

横浜教会 堀口知衣子さん

平成7年に結婚した知衣子さんは、結婚前とはあまりに違う夫の言動に絶望の縁をさまよっていた。わがままで独り善がりな性格で、育児にまったく関心を示さない夫とは、相手がそこに存在しないかのように振る舞う冷たい関係だった。そんな折り、同居していた舅が他界し、その葬儀に参列した人々との関係が変化のきっかけとなる。相手に寄り添い、親身にアドバイスをしてくれるまごころに接し、知衣子さんの意識に変化が現れたのだ。振り返ってみると、「夫を軽んじていた」と内省する。それからは、家庭内のことをすべて夫に相談するように努めると、仕事で疲れているのもいわず、耳を傾け、対応してくれる。そこには結婚前のやさしく頼りがいのある夫がいたのだ。夫を信じ、夫に任せる。そんな当たり前のことに気づけたことが、ほんとうに有り難いと思えた。いま、見方を変えた知衣子さんの視線の先には、あたたかな家庭の姿が映っている。



## 軽んじない

法華経の常不軽菩薩品に、「我汝を軽しめず」という一句があります。この言葉を私たちの日常に照らすと、人を「軽んじない」とは具体的にどのような姿勢や態度といえるのでしょうか。

道元禅師が「悉有は仏性なり」と受けとられたように、私たちはもちろん、この世のすべては仏性そのものであると教えていただいています。私たちは、みな「仏の御いのち」であるというのです。「休禅師も私たち人間がいかに尊ぶべき存在であるかについて、「一切の衆生と仏へだてなし隔つるものは迷い一念」と喝破していますが、そのことに気づけば、人を尊び、敬うことが私たちの自然な姿だといえます。

なかには「自分のように至らない者が、仏性そのものとは思えない」とか「人を憎んだり、欲張ったりすることもある私が仏と同じなんて」と考える人がいるかもしれません。しかし、そのように自分を省みるのは、内からの催しともいうべきものがあるからです。じつは、それこそが仏性そのもののはたらきであり、おのおのが「仏の御いのち」にほかならないことの証なのです。

# 立正佼成会